

## ▲▼▲2017年 7月22日 第50回クリエイティブサロン開催報告▲▼▲

## 講演会：『新たな価値を創る方法論としてのForesight Creation』

講演者：松波晴人氏 大阪ガス行動観察研究所所長、兼(株)オーグス総研行動観察リフレーム本部



(概要) イノベーションが求められる中、「新価値創造の方法論」として様々な方法論が提唱されているが、この分野における理論とメソッドはまだ確立されているとはいえない。大阪ガス行動観察研究所は、これまでの実績(プロジェクト累計1,000件)を踏まえて、「新価値創造の方法論」の理論とメソッドを構築することを試み、Foresight Creationと名付けた。この方法論においては、必要とされる能力を「8つの玉」の理論としてまとめ、それぞれの「玉」を育成する方法論を開発した。このForesight Creationを大阪大学でForesight Schoolとして学生を対象として実施した結果、1) 新たな価値を生む消しゴムが商品化される、2) EDGEコンペにて阪大チームが優勝する、といった成果が得られた。本講演では、Foresight Creationの方法論とはどういうものなのか、新価値創造において重要な点はどこにあるのか、を解説した。特に、8つの玉の内、リフレーム、統合、マインドセット、先見力の玉について事例を交えて説明を行った。リフレームとは、ビジネスにおいてそれまで常識とされていた解釈やソリューションの枠組み(フレーム)を、新しい視点・発想で前向きに作り直すことである。統合とは、これまで組み合わせられてこなかった異質なものを組み合わせることによって新たな発想を生み出すものである。また、新価値創造に必要なマインドセットはGrowth Mindset(成長のマインドセット)であり、失敗の後に前向きさが増大する、自己効力感のことである。そして、先見力とは「新しい発想」の妥当性を目利きし、評価する能力のことであり、顧客の理解と実現したい未来への意志から形成される。

(所感) 活発な質疑応答の中、とても勉強になったのは、創造におけるこれまでの先人の知恵(それは、とりもなおさず創造学会のみなさんの知恵でもある)と、今回紹介したForesight Schoolの共通点である。新価値の創造を、方法論としてメソッド化しようとするForesight Creationの取組において、もちろんすべてが見える化できたわけではない。むしろ、手順化できるのはここまでであり、あとはこれまでの知恵をもとに、Do & Learnしていくしかないのではないかと、この思いを強くした。

(記事 松波晴人)

## ワークショップ：『Foresight Creationにおける特に重要な「玉」の理論と実践』

講師：松波晴人氏 大阪ガス行動観察研究所所長、兼(株)オーグス総研行動観察リフレーム本部  
平松健氏 大阪ガス行動観察研究所研究員兼(株)オーグス総研行動観察リフレーム本部



(概要) Foresight Creationとしてまとめた「新価値創造の方法論」においては、必要とされる能力を「8つの玉」としてまとめた。その内の、4つの「玉」について、参加者のみなさんとともにグループワークを実施した。1つ目は着観力、いかに気づきを得るか、そのためには受容(受け入れる)と学習(他者から学ぶ)が重要である、ということを知覚的不協和に関するワークを実施することで共有した。2つ目はリフレームで、こちらについてもワークを通じて、「いったん持ってしまった仮説から、さらに別の仮説を考えることがいかに難しいか」ということを体験してもらった。3つ目はマインドセットで、「森の中に入るワーク」「さしすせそ」を禁止するワークなどを通じて、いかに失敗を恐れがちであるか、チャレンジ精神を持ちにくくなっているか、を実感していただいた。これまで、「新価値創造」についてはスキルの面が注目されてきた側面があり、もちろんスキルは重要なのであるが、今回のForesight Schoolの実践を通じて得られた学びは、スキル以前に「マインドセット(特にチャレンジ精神や自己効力感、他己実現など)」があることが重要である、ということである。4つ目はメタ認知である。Foresight Creationで用いる「fact→insight→foresight」の手法を用いて、自らの理解を進める、ということを実施してもらった。重要なのは、行動観察を通じて「他者を理解する」と同時に、「自分を理解する」という点である。つまり、新しい価値を生むためには、自分がそもそもどういう枠組みにとらわれているのか自分で把握するとともに、自分の意志を明確にすることが必要である。

(所感) チャレンジ精神を失っているのではないかと、というのは様々な組織で問題になっていることであるが、創造学会のみなさまは別であった。森に入るワークではすべての班が森に入り、またリフレームのワークでは知覚的不協和を乗り越えた班がとても多い、ということから考えると、参加者のみなさんは成長のマインドセットをもち、さらには柔軟な考え方をお持ちであることがわかった。問題は日本全体をそのようなマインドに変えていくことである。

(記事 松波晴人)